

丁度

江戸時代（1603-1867）の社会の大名家の地位は、官位、収入、政治的影響力だけでなく、日常生活の洗練度、優美な櫛、扇、湯飲み、屏風、そして彼らの高い地位を反映したその他の装飾品などによって決められていた。大名家にとってこれらの調度と呼ばれる多くの個人的、家庭的なアイテムは、センスの良さ、階級、個人の美観を表現する媒体であった。

江戸時代、花嫁は夫の家に家財道具一式を持ち込んだ。嫁入り道具の一式の全部に同一のデザインが施され、多くの場合、花嫁の実家あるいは花婿の実家の家紋がついている。この洗練された芸術品のコレクションは、江戸時代の結婚式でお披露目され、花嫁の実家の財力を示したのである。

食器

江戸時代の食事は、掛盤と呼ばれる個人用の脚の付いたトレイで供され、そのトレイの上に食事の量に合わせて多くの漆塗りの皿、椀、碗が載せられている。漆は多くの場合、辰砂で赤く着色され、豊かさを出すものであると同時に、食べ物の見た目を引き立たせる効果があった。

洗面用具と化粧

洗面器、鏡、櫛、化粧用の箱、その他の装飾品など、さまざまな手入れ用品が標準であった。19 世紀の終わりまで、上流階級の既婚女性は酢に溶かした鉄粉を使って歯を黒くすることが一般的な習慣であった。この習慣はお歯黒として知られ、歯を腐食から防ぐと考えられていた。

駕籠

彼らが住居を出て旅行するとき、高貴な人々は数人によって担がれる一人乗りの駕籠で運ばれた。駕籠の大きさや装飾は、乗る武士の階級によって決まっており、大名の駕籠はしばしばそれ自体が芸術品であった。

書道ボックス

大名の家庭生活では、人々は手紙、詩、日記を書くのに多くの時間が費やされた。筆と

墨を収納するための箱（硯箱）は洗練されたアイテムで、趣向を凝らしたデザインや有名な詩のモチーフが施され、金や銀が多く使われたものもあり、所有者の趣味と芸術的な感性が反映されている。

盤上遊戯

碁、将棋（日本風チェス）、双六（日本風バックギャモン）、などの盤上遊戯は、花嫁道具として欠かせない道具であった。これらの3つの遊戯の習得は、大名家の家族にとって重要な社会的な教養であった。

喫煙具

江戸時代の人々は刻みタバコを吸っていた。木製タバコ箱、またはタバコ盆には、煙管、刻みタバコ、吸いかけのタバコを入れておく陶器製の火入れ、タバコに火をつけるために使う金属箸、および灰皿が含まれている。

客間の装飾品

室町時代（1336～1573）以降、中国の装飾工芸品は高く評価された。大名の家では、掛け軸が床の間によく飾られていたが、床の間には他の芸術品を展示する棚も多くあった。